

突然の連絡

「えっ、マジですか!? 何で?」
突然の連絡で何がなんだかわかりませんでした。

谷口マツコさん(当時83歳)が農薬を飲まれ、救急車で運ばれたとの家族からの連絡でした。

谷口さんは、僕の勤めていたデ
イサービスを利用していました。
心も身体も声も非常に大きな人
です。彼女の回りにはいつも笑い
声が絶えません。生まれた時から
ずっとその場所に暮し続け、その
地で結婚し、子供も育ててしま
した。今ではすっかり住宅街になっ
てしまったこの地域は、昔、塩田
があつてたくさんの方が暮らし、
朝から晩まで仕事をしていたそ
うです。そして、今は全く跡形も
ありませんが、共同浴場も2か所



認知症の人が
最期まで「生ききる」暮らしの支え方 **+5+**

もっと話を したかった...

利用者に訪れる突然の死、暮る後悔——。
皆さんもこんな経験がありませんか?

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

ありました。1日の仕事を終える
とたくさんの方がその浴場に集
まり、賑やかな声が響いていまし
た。ある時、近くの海岸で地域の
子供たちがいなくなり、1か月間
ずっと男どもは子供たちを探し
回り、女性捜索をする男ども
のために海岸端で煮炊きをして、
地域住民みんなで探し回ったこ
ともありました。これらは全部彼
女が教えてくれました。その地に

暮らし続けてきたからこそ知っ
ているし、伝えられることです。
病院での谷口さん
病院に走っていき、病室の扉
を開け僕の目に映った谷口さんは、
眼をそむけたくなるような姿で
した。飲んだ農薬を救命措置で
吐き出されたのでしょうか。その農
薬の色なのかよくわかりません

「何で、そんなもの飲んでしまっ
たんですか? 谷口さんは飲んで
はいけないものはしつかりわかっ
ていたはず。何かあつたんですか?
何ですか?」
つい僕はご家族に詰め寄って
しまいました。しかし、ご家族は
「私たちも何でかわからん」とそ
れだけでした。
**事實は
わからないまま...**
翌日、デイサービスでは当然の
その話題になりました。谷口さん
の近所の方のお話だと、3年ほど
前から同居していたお嫁さんと

の関係がうまくいっていなかったとのこと。食事はいつも別々、おかずも谷口さんにはほとんどなくて、梅干し1個だけという時もあつたそうです。しかし、これも近所の方の話ですので、事実かどうかは谷口さんに聞いてみないとわかりません。でも今となつては、谷口さんは何も答えられない状態です。

あんなにいつも笑顔で周囲を包んでくれた谷口さんが自宅でどんな暮らしをしていたのか？ どのような悩みを抱えていたのか？ 僕は全く知りませんでした。知ろうとしていなかったのだと思います。なぜなら、僕はデイサービスでお会いするその笑顔の姿だけで、谷口さんは安心できる暮らしをしていて、心配事は何もないのだろうと勝手に思い込んでいたのです。

谷口さんはそれから1週間ほど危険な状態が続き、そのまま病院で息を引き取られました。

読者の皆さんには、僕と谷口さんのような出来事はこれまでなかったでしょうか？ 僕たちがかわつている高齢者の方々は、常にリスクを抱えています。僕はデ

イサービスの職員だった頃、谷口さんだけでなく、もつとお話をしておけば良かったと後悔している利用者が数名います。

社交性のある 木田さんとの別れ

2月のある寒い朝、毎週金曜日にご利用される木田さん(仮名)という女性をいつも通りお迎えに行きました。お迎えに行くといつも準備万端で、玄関に座つて送迎車を待つてくださっている方でした。しかし、その日に限つて、玄関にカギがかかつていて、庭に面した窓のカーテンも閉まつていました。「おかしいなあ？」と思いつつもベルを慣らし、また勝手口や窓からも木田さんの名前を呼び続けました。

木田さんは小柄な女性で、社交性もあり、時にはタクシーを呼んで買い物にはひとりで行かれる方でした。「何か急用でもあつて出かけたのかなあ？」と思いつつも、僕はいったん引き上げました。でも、事業所に戻つてからも気になり、1時間後また木田さんのお家に行きました。やはり玄関には鍵がかかり、カーテンも閉まつて、全く状況は変わつてい



ません。もう一度、家の周りを回ると、トイレの小さな窓が開いていることに気づいたので、よじ登つて中を覗いてみました。すると、トイレのドアのところで木田さんが倒れていました。いくら叫んでも、反応がありません。役場の方や救急隊の方を呼び、中に入り込みましたが、木田さんはすでに亡くなつておられました。救急隊の方のお話だと、深夜にトイレに行かれ、軽い脳梗塞を起さされ、そのまま倒れて頭も打たれたのではないかと、死後6時間以上経過しているとのことでした。木田さんとの突然のお別れでした。

亡くなつてからでは もう遅い

僕はこの介護という仕事につ

いて、これまで「ちょっと待つててくださいね」という言葉を使い、その場を立ち去つて、長い時間お待たせしてしまつたり、もしかするとそのまますっかり忘れてしまったこともあつたかもしれない。また、「今度、ゆつくりお話し聞かせてください」「今度、遊びに行きますから…」と言つてそのままにしてしまつたことが、今振り返ると何度もあつたと思います。

寂しさや孤独感、疎外感を感じた時、誰かにそばにいてほしい、話を聴いてほしいと誰もが思います。また、嬉しいことがあつた時、その喜びを誰かに伝えたい、共感してほしいと思う時もあります。目の前の高齢者の方々のそのサインを僕はどれだけ見逃してきただろう。もしかすると、忙しきにかまけて目を背けたり、耳をふさいでしまつたこともあつたと思います。

「もつと話をしたかった」といくら思つても、その方がお亡くなりになつてしまつてからではもう遅いのです。